小説 医師会長日記

三浦隆蔵

著者略歴

明治44年（1911年）東京に生まる。医師。
文芸誌「城砦」主宰「小説と詩と評論」同人
長篇小説「金門島」（河出書房新社）随筆集
「診察室うらおもて」（精文館書店）その他
の著書がある。
現住所　千葉県八千代市八千代台東 1—36—8

小説　医師会長日記

昭和47年6月30日　印刷
昭和47年7月5日　発行

著　者　三浦隆蔵（みうらたかぞう）
発行者　洲上祐史
発行所　株式会社　金剛出版

東京都新宿区市ケ谷柳町24番地
〒162・振替東京34848番
電話(03)260—3643, 2488

印刷・高野印刷
製本・河上製本

定価 780 円

© 1972

0093-721005-2354

19118

日文 701687117

小説

医師会長日記

三浦隆蔵

金剛出版刊

もくじ

小説　医師会長日記……五
一、医師会長日記――父の手帳――……七
二、叫び――子のノート――……八六
罪の記録……一七一
あとがき（中田耕治）……二五二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

そうてい・須田結子

小説

医師会長日記

一、医師会長日記

――父の手帳――

一月一日

朝、鶏の声で目が覚めた。正月で近くの工場も会社も休み、自動車も通らない。町全体がひっそりと静まり返っているため、隣りのカステラ工場の留守番が飼っているチャボの啼き声が、珍らしく余の寝室まで伝わってきたわけである。

余はこのごろ、眠れないので殆んど毎晩、バラミンをのむ。これは普通一錠が適量で、三錠のむと致死量になる。余も医者としてこれまでその中毒者や、のみすぎて死んだ人間を手当て

したので、薬の危険性を知りぬいている。だが、のまないと眠れない。余のからだが薬を要求するのである。殊に昨夜はハナが遅くまで掃除をしていたあと、浅草の観音様へ初詣でに出かけて行った。余のためお札をうけてくるというのだが、つき合いで起きているのは真平だから、早いうちにバラミンを二錠のんで寝た。お蔭で目覚めの気分は爽かである。

ハナはまだ隣りの布団でよく寝入っている。しかし、欄間から射しこむ光りで枕時計を見ると、もう十時をすぎていた。いくら休日とはいえ、起きねばならない時間であろう。スタンドをつけたら、そのわきにハナのハンドバックと並んで観音様のお札とおみくじが広げられていた。それにハナものんだのか、バラミンの包装と水の入ったコップ。いずれもハナが余へ見よがしにした小細工である。余は寝たままおみくじをとって、一応読んでみた。五十九番大吉で「病人は本復すべし」と書いてある。余は思わず苦笑した。ハナは看護婦上りらしくなく、こんな文句をそのまま信じ、余にも病気が治るといいはりたいのか。余はむしろ、おみくじの卦をハナと正反対に解釈する。大吉は凶に通じるもので、病人は本復どころか「死ぬ」、間違いなく余はこの一年間に死ぬのだ。

考えると、今日で余も数え年六十歳、その最後の正月が鶏鳴で明けたというのも、残り少ない「余生」を楽しめという神意であろう。

やがて新聞の都内江東版にのるはずの訃報が、冷めたく脳裡に浮かんだ。江端宗一氏と、余

の名のわきには死者を現わす黒線がついている。

「**江端宗一氏**　医学博士。前墨田医師会長。医療法人江端病院長。氏は戦前、本所（現在の墨田区）より東京市会議員に二期当選し、厚生、文教方面を担当、また医政の上でも多大な功績を残したが、昨日胃癌のため逝去した。告別式は仏式により墨田区錦糸一の自宅、江端病院にて午後一時より営まれる」

余の一生をかような短文で要約されるのは残念である。実際の文面は更に圧縮されると思うが、紙面のスペースが足りぬゆえ仕方あるまい。しかし葬儀は余が三十余年間に診た患者が会葬に集まるだけでも相当な人数で、花輪も病院前から近くの菓子屋街まで氾濫しよう。立派な告別式にはなる。とはいえ、死んで野辺送りをされるのは、他でもない、余自身なのである。しかも棺の覆いがどれほど美々しく飾られようとも、その中を見よ。

癌を患った病人の末路が悲惨の一語につきること、また今日、世界中の医学者が癌を克服するために、不眠不休の努力をつづけ、治療方法も日々進歩しているが、しかし多くの場合、発見された時は手遅れで、手術をしても、放射線を浴びせても、抗癌剤を使っても、結局は病人や医師のはかないあがきにすぎず、病人は苦しみ死にするしかないことを、いまではどんなしろうとでも知っている。そのため、医師は癌の患者を診ても、病名をはっきり教えない。またうすうす感づかれても、最後まで否定して患者に希望をもたそうとする。病気の正体を知られ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

たら、患者が絶望の余り自殺を図ったり、闘病の意力を失くす恐れがあるからである。だが、主治医のそういう善意に護られ騙されたまま、息を引きとれる病人が、余は妬ましい。余はしろうとではない。この目でこの手で多くの癌患者の最後を看とり、病気がどんな経過を辿るかを知りつくしている。余自身救いを求めて貪るように癌の最新知識を学んだ。そしていま現実に余は胃癌患者でありながら、どんな名医にも縋れない。名医もここまできては無力であることを、同業なだけにその手の内をわかってしまう。余は病人であると同時に、一面、医師として自分の病状を観察し、判断し、結論づけていかねばならない。長年の習慣で否応もなく頭がそのように廻転して行く。この歯車を顧わくば、誰かに止めてもらいたい。だが、そんな器用な人間はどこにもいない。だから、余は、こう書きながらもたえず、余の醜怪な屍体のイメージと対決せねばならなくなるのだ。

棺内に横たわるのは、もう元気な時の余ではない。死によってようやく解放されるまで、余は癌により全生命も全人格も踏みにじられ翻弄され、悲鳴をあげて逃げまどい、のたうち廻る。力がつきて絶息する時は、ふた目と見られぬ餓鬼の姿だ。食事は通らず、四六時中襲ってくる劇痛に苦しみ喘ぎ、癌特有の悪液質や腹膜炎を併発し、腹だけがどす黒く汚れた皮膚を張り裂かんばかりに膨れ上っている。そのくせ手足や顔は全く肉が削げ、骨を僅かに薄皮が覆っているだけのミイラである。余は白く濁った瞳をうつろにあけたまま、乾いて割れた唇の端に茶色

の臭い涎をひりつけている。ハナや息子の駿が余の屍体を清め、ただれた臀の床ずれにも新しい布をあて、開いた肛門に綿をつめ、或いは手の爪までも剪るかもしれない。だがたとえ、どんなに美しく装われようと、本質的な醜さは決して変るものでなかろう。

「先生」と、余の耳もとで囁く声が甦ってきた。余が癌患者の末期につきそった時、その家族からよく訴えられた言葉である。「先生。どうせ何をやっても助からないのなら、肉親として病人の苦しむ姿を見ていられません。お願いですから、いっそ楽に死なせてやって下さい。眠ったまま、静かに息を引きとらせて下さい」、病人の息子が、妻が、思い余った様子で相談をもちかけてくる。医師として余はもちろん最後まで病人に希望をかけ、生かそうとする。だが、癌の場合は病人を苦しませ生かしつづけることが、果して正しいか。医師も人間である。それに己れの力の限界を知りつくしている。若い、血気にはやる修業時代の医師とは、考え方も変化している。「頼まれても殺すわけにはいかないよ」と、口ではいっても、強心剤や補液の注射を減らす。モルヒネを打つ。モルヒネの毒で寿命が縮まるにせよ、薬が効いているうちは、病人も苦痛から解放される。それに睡眠薬を投与する。つまり癌と対決するのでなくて、癌から逃避さす。意識を曇らせうつつにし、安眠させつつ死なすのが、余が病人につくせるただ一つの贈り物だった。もう先が長くないと認めれば、モルヒネを注射しすぎて中毒症状を起こそうと、余は問題にしなかった。もちろん医師としては、モルヒネ中毒患者を作ってならな

い。そのために麻薬取締法と呼ぶ法律があり、医師の麻薬保管や患者への施用が監視されている。購入し保管している数量と品名を常に記帳し、使用した患者の氏名や数量もいつ点検されてもよいように整備しておく。違反をすれば医師免許証はとりあげられ、医師の資格を剝奪される。ただしそうした罰則のあるなしに拘らず、法の精神を守るのが、医師として当然もつべき常識ではある。それが医師の倫理というものであることくらいは、余も十分承知をしている。しかし癌の末期患者は例外である。余は法を無視してモルヒネを一日に何回でも、患者の苦痛をとり除くために注射した——。

おみくじを丸めて棄てると、余は布団の中で寝間着をはだけた。去年の夏、手術をしたあとにくらべると、余の体にも肉がついてきた。病気以前の、身長一七〇センチ、体重七十キログラムまでには恢復しないが、一時でていた下腹の皺は消えている。余はみぞおちから臍下まで走る手術の痕をおしてみた。傷痕は赤くケロイド状に盛り上っているものの、圧痛はない。右の下腹、回盲部に触れると、ググッと鳴った。ここは手術の時、胃といっしょに切りとった部分であるため、ガスの通りが多少、悪いのだろう。が気にするほどの症状ではない。どこにも癌の再発を想わすような症状がまだないことを確かめてから便所に行った。水洗の陶器に浮かんだ排便の色や形を眺めたが、いずれも正常なので、癌細胞による腸の破壊出血は起こっていないと診断した。そこで初めてゆっくり立ち上り、便所の窓から空を眺めた。

いつもは煤煙でくすんでいるのに、今日は珍らしく澄みわたり、薄い白雲が隣りのカステラ工場の黒いトタン屋根ごしに浮かんで見えた。自然の、そんな些細なたたずまいにも、余は以前と違った意味を見出す。見ようによっては変哲もない町の冬空に心を引かれて、しばらくぼんやりと眺めつづけた。それから紐を引き排便を流したが、激しい水音を聞くうち、大きな手ぬかりに気がついた。それは既に流れてしまった糞塊を採取して、潜血の有無を化学検査しなかったことである。わずかな出血は肉眼で判断できない。余が「異常なし」と認めた排便も、試薬を使えば癌からの出血が現われたかもわからない。同じ理窟で、上から触っただけでは変化がなくとも、実際は癌細胞がこうしている間も刻々広がり、凡ゆる臓器を侵蝕しつづけているのではなかろうか、と思った瞬間、いつものようにまた両耳が鳴りだした。ダダダダ、ダ、ダダダダダ、山が崩れるように響いては、瞬間ためらうようにふと止り、今度は鼓膜が裂けんばかりに痛んだ。余は両耳を押えて便器の上にうずくまり、目を閉じた。

「死にたいな」、余は肩で息をしながら呟いた。「自殺をしてやる。明日は必ず死んでやる」、自分を納得させるため、一語一語を区切ってうめいた。この呪文の効果はまだ上らない。耳鳴りを鎮めるために、余は息をつめ唾をのみこんだ。駄目。中尾教授の濁み声が耳鳴りに混って湧き上ってくる。

「きみ、これは完全に手遅れだ。まあ切取れる範囲はあらかた除いておいたから、一年くら

いは再発を防げるだろう。再発したら、もう手術はできないからラジウム療法をする」

教授は自分の言葉の残酷さに気づかない。自分の行なった手術の手際のよさを自慢げに、余の体から切取った胃や腸を膿盆にのせ、ピンセットで無雑作に癌の広がった部分を突きながら、立合った駿を呼び寄せて説明したそうな。その時、余は麻酔から覚めていず、何も知らずに手術台上で眠りつづけていた。余は浅はかにも——世の多くの患者同様——中尾教授の口車にのり、手術をうけさえすれば、癌と絶縁できると信じきっていた。

余にしてみれば、誰でもいつ癌に侵されるかわかったものでなく、しかも初期には自覚症状が強くなく、ともすれば見すごして、気がついた時には手遅れになり易い危険を知りぬいている。だから時折、深酒をした夜中などに胃が痛むのを気づかって、駿やハナから「癌ノイローゼ」などと笑われながらも、胃癌手術の権威者である中尾教授の精密検査をうけに行ったのである。教授は検査、成績が出揃ったあと、余にいった。「たいしたことはない。そう心配しないでもいいだろう」。余は期待通りの言葉にほっとしながらも、壁のシャーカステンにかけられてある余のレントゲンフィルムを凝視した。気のせいか、胃皺襞が不規則に乱れて、幽門部にもバリウムが均等に広がっていない。単なる胃炎にしてはおかしい。怖る怖る、余は教授に質問し、合せて胃カメラの写真も見せてほしいと頼んだ。その時になって初めて教授は顔をシャーカステンに近づけた。「うむ。そういわれれば、すこし癌らしいところもあるな。よかろ

う。すぐ入院したまえ。癌があったとしても、幽門部にほんの僅かだ。切取って治してやるから安心したまえ」。有無をいわさずその場で入院を決め、次の患者を呼び入れた。余には遂に胃カメラの写真を見せてくれない。しかしその時は、教授の口調や名声に圧倒され引きずられ、彼の言葉を素直に信じた。信じる以外に道はなかった。その時、教授は既に余の病態を知っていたのか、それとも開腹するまでは、彼が余に語った通り、軽症と信じていたのか、判断をする材料はない。またいまとなっては、そのどちらでも結果に変りはなく、開腹してみたら癌は胃の一局部だけではなく、既に肝臓や腸にも広がっていた。教授は実態を駿に告げたが、余は手術後も麻酔が覚めてから、身のおきどころもない苦しみに喘ぎつづけていたので、主治医や家人のいう「嘘」を素直に信じ、これで治ると懸命に希望と闘志をかきたてた。けれども、すこし落付くと余にも医師の本能がある。自分の容態を悉しく知りたく、夜、ハナに付添われて便所へ行った時、人気のないのを見定めて、看護婦勤務室へそっと入った。余の病歴表を抜きだして盗み見した。そして余はからくりのすべてを知った。癌らしいどころではない、立派な胃癌、しかもその大部分を除いたにせよ、取りきれずに残った癌がゲリラ部隊となって諸臓器に潜伏している。その残敵が同志を結合し、雲霞のような大軍となり一斉蜂起するのも、いまは時間の問題でしかない。余の余命は一年しかなく、破滅を防ぐ方法はない。中尾教授にこれ以上救いを求めたところで無駄と知った時、余は教授を癌の通謀者、味方と思わせて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com